

昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況に関する研究

—安積、磐城、福島、相馬各中学の状況との比較・検討を中心に—

渡辺 一弘

会津大学短期大学部研究紀要 第75号抜刷

2018年3月

昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況に関する研究

—安積、磐城、福島、相馬各中学の状況との比較・検討を中心に—

渡辺 一弘*

【要旨】本稿は、昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況を、福島県内の先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の進路状況と比較検討することで、これら4校とは、歴史的に設置において異なる状況であった旧制会津中学校の生徒の進路状況の特徴を、考察することを目的とする。検討の結果、主に以下の5点が明らかになった。

1. 高等学校・大学予科への入学者数は、会津中学も先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）も、全体としては、やや減少傾向にある。
2. 専門学校への入学者数は、官公立は、増加傾向の中学（会津・安積・磐城）と、減少傾向の中学（福島・相馬）に分かれた。私立は、増加傾向の中学（安積）と、横ばい傾向の中学（磐城・相馬）と、減少傾向の中学（会津・福島）に分かれた。会津中学は、私立専門学校の入学者数の全体は、一番多い。
3. 軍関係諸学校への入学者数は、昭和10年以降、すべての中学で、大幅に増加している。会津中学は、軍関係諸学校の入学者数の全体は、一番多い。
4. 官公署へ就職する者は、すべての中学で増加している。
5. 教員、実業関係、その他の職種等の者の数は、各中学によって差が見られる。¹

*会津大学短期大学部幼児教育学科教授

1. 問題の所在

本稿は、昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況を、福島県内の先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の進路状況と比較検討することで、これら4校とは、歴史的に設置において異なる状況であった旧制会津中学校の生徒の進路状況の特徴を、考察することを目的とする。

周知のとおり、我が国における中等学校入学志願者は、大正中期以降、年々増加し、昭和に入ってから中等教育は、著しく量的に拡大した。本稿は、そのような昭和初期における、旧制会津中学校生の進路状況を、福島県内の先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の進路状況と比較検討することを目的とする。具体的には、旧制高等学校・大学予科、官公立や私立の専門学校、陸海軍関係諸学校の入学者や、官公署、教員、実業関係等の就職者の状況を、昭和2-13年の時期において、安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学の生徒の進路状況と比較・検討しながら、会津中学校生の進路状況の特徴・傾向を明らかにする。

福島県内の公立旧制中学は、1884（明治17）年開校の安積中学（*開校時名称は、福島中学、その後第一尋常中学（一中））に始まる。その後、安積中学の磐城分校として、磐城中学（第二尋常中学（二中））が、1895（明治28）年に開校し、1898（明治31）年には、福島中学（第三尋常中学（三中））と相馬中学（第四尋常中学（四中））が開校した。

これらに対して、会津中学は、1900（明治33）年に開校し、翌年県立に移管した。しかし、学校自体は、その10年前の1890（明治23）年に、私立会津中学校として開校しており、更に遡れば、旧会津藩藩校日新館の教育を意識し、その伝統を受け継ぎ、1883（明治16）年に創設された私学の会津日新館が源流であった。つまり、先に示した、公立の先発旧制中学等とは異なり、米沢の興譲館中学や、福岡の修猷館中学の様に、校名に直接的に旧藩の藩校名こそ入らないが、藩校の伝統を受け継いだ中学校であるといえる。よって、このような歴史的な背景の異なる旧制中学、特に会津という近代日本における、ある種特別な意味合いをもつ地域の旧制中学校生の進路状況を、福島県内の公立先発旧制中学4校と比較・検討することは、意義があると思われる。

筆者はこれまで、1998年の日本教育社会学会大会において、熊本県を事例にして、明治期に開校した伝統校2校（済々黌中学、熊本中学）に焦点を当てて、昭和初期（2-13年）の熊本県の旧制中学校生の進路状況を、3年ごとに4つの時期に分けて考察して、以下の4点を明らかにした。

- ①高等学校・大学予科、専門学校への入学者は横ばい傾向にある。
- ②軍関係諸学校への入学者は、県全体で激増（特に上記2校）している。
- ③官公署に就職する者は、徐々に増加している。
- ④明治期開校の伝統校グループと、大正期以降開校の後発校グループ、私学グループにおいて、進学先に格差が生じている。

また、筆者は同時期の、東北地域全体における旧制中学校生の進路状況についても概略的に検討した、その結果、以下の4点を明らかにした¹⁾。

- ①高等学校・大学予科への入学者の割合は、年々減少している。
- ②専門学校への入学者の割合は、官公立も私立も横ばい傾向にある
- ③軍関係諸学校への入学者の割合は、昭和11年以降、特に増加している。
- ④官公署に就職する者の割合も、昭和11年以降、特に増加している。

これらの先行研究も踏まえて、本稿では、会津中学校生の昭和2-13年の時期における進路状況の推移を、先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の生徒の進路状況と比較・検討しながら明らかにする。

なお、分析の時期を昭和2-13年の間としたのは、資料の制約の点からである。また、上級学校入学者は、筆者の先行研究と同様に中途退学の進学者も含めた。これは、その理由としては、旧制高等学校への入学者において、中学校4年修了での進学者が2割から過半数を占めたこと、専門学校への入学者においても、中途退学の進学者が見られたこと、軍関係諸学校への入学者においては、年によってはその内の7割から8割を中途退学の進学者が占め、無視できないと考えたからである。就職者に関しては、実業関係等の就職者のみ、中途退学者も含めた。その理由は、分析資料の「退学事由別員数」に「実業ニ就キタルニ依ル者」の項目があるからである。

2. 分析方法と分析資料

(1) 分析方法

本稿では、以下の方法で分析する。

- 1) 昭和2-13年を4年ごとに3つの時期に分け、それぞれの時期における福島県内全体中学校の進路状況の変化を調べ、東北地域全体の状況と比較・検討を行う。
- 2) 同時期における福島県内の先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の進路状況と会津中学の進路状況を調べ、比較・検討を行う。

(2) 分析資料

分析資料は以下のものを用いた。

- ・文部省 1988, 『全国中学校ニ関スル諸調査 第九卷(昭和2年、3年)』。
- ・文部省 1988, 『全国中学校ニ関スル諸調査 第十卷(昭和4年、5年)』。
- ・文部省 1988, 『全国中学校ニ関スル諸調査 第十一卷(昭和6-10年)』。
- ・文部省 1988, 『全国中学校ニ関スル諸調査 第十二卷(昭和11-13、15年)』²⁾。

3. 結果と考察

(1) 福島県全体の進路状況について

表1 福島県内中学全体の、昭和2-13年卒業者の4年ごとの進路状況

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専門 学校及之 と同程度 学校入学 者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署二 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	實業二就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	334	723	450	35	101	170	1,626	2,326	5,765
S6-9	280	553	473	38	126	72	2,108	2,520	6,170
S10-13	168	558	363	138	298	100	1,847	1,961	5,433
合計(人)	782	1,834	1,286	211	525	342	5,581	6,807	17,368
『全国中学校二関スル諸調査 第九巻(昭和2年、3年)、第十巻(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一巻(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二巻(昭和11-13年、15年)』から作成									

表1から、昭和初期の福島県の進路状況の変化を見てみる。まず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、年々、減少している。専門学校への入学者数は、官公立は、昭和6-9年の第2期に減少し、その後、横ばい傾向にある。私立は、第2期に若干増加するが、その後、減少している。軍関係諸学校への入学者数は、昭和10-13年の第3期に、それまでより3倍以上増加している。このことは、昭和6年の満州事変から、昭和12年の日中戦争の開始のこの時期の状況が、旧制中学の生徒の進路にも大きな影響を与えたと考えられる。

次に、就職者についてだが、官公署へ就職する者は増加していて、特に第3期の昭和10年以降は、それまでの2倍以上増加している。昭和不況から軍国主義の時代へと移行する時期の世相が、この進路状況に影響を与えているのかもしれない。これに対して、教員、実業関係は、全体としては横ばい傾向にある。また、その他の者も、横ばい傾向にあるといえる。

(2) 福島県内の先発旧制中学4校(安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学)の進路状況について

表2 安積中学の昭和2-13年卒業者の4年ごとの進路状況

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専門 学校及之 と同程度 学校入学 者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署二 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	實業二就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	39	87	61	4	10	10	15	423	649
S6-9	46	87	61	4	17	4	131	375	725
S10-13	19	109	72	29	41	9	212	263	754
合計(人)	104	283	194	37	68	23	358	1,061	2,128
『全国中学校二関スル諸調査 第九巻(昭和2年、3年)、第十巻(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一巻(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二巻(昭和11-13年、15年)』から作成									

表2から表5までは、昭和初期の福島県内の先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の進路状況をそれぞれまとめたものである。以下、順に4校を検討してみる。

表2は、安積中学の昭和初期の進路状況をまとめたものである。まず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、当初増加したが、第3期の昭和10年以降、減少している。専門学校への入学者数は、官公立も私立も、第3期の時期に、少し増加している。軍関係諸学校への入学者数は、第3期に、それまでより7倍以上増加していることがわかる。安積中学は、福島県内で最も古い伝統をもつ公立中学ということもあり、昭和10年代に入っても、軍関係諸学校以外に、専門学校においても入学者は増加していることが確認できる。

次に、就職者についてだが、官公署へ就職する者は、年々、増加していて、福島県の全体の傾向と同様に、第3期の昭和10年以降は、それまでの2倍以上増加している。また教員は、横ばい傾向だが、実業関係は、官公署と同様に、年々、増加していることが分かる。逆に、その他の者は、年々、減少している。その要因として、この項目の中には、上級学校進学のための浪人も含まれているので、時節柄、そのような生徒が減っていることも推察される。

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署二 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	実業二就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	55	80	75	3	6	31	163	300	713
S6-9	35	94	60	3	18	2	324	424	960
S10-13	26	120	63	8	20	1	266	370	874
合計(人)	116	294	198	14	44	34	753	1,094	2,547
『全国中学校二関スル諸調査 第九巻(昭和2年、3年)、第十巻(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一巻(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二巻(昭和11-13年、15年)』から作成									

表3は、磐城中学の昭和初期の進路状況をまとめたものである。まず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、年々、減少している。専門学校への入学者数は、官公立は、年々、増加している。私立は、やや減少傾向にある。軍関係諸学校への入学者数は、昭和10-13年の第3期に、それまでより2倍以上増加しているが、先の安積中学と比べると、増加率は低いといえる。

次に、就職者についてだが、官公署へ就職する者は、年々、増加している。この傾向は、先の安積中学、福島県全体の傾向と同じである。ただし、増加率自体は、あまり高くないといえる。また教員は、第2期の昭和6-9年以降は、極端に減少していることが分かる。実業関係は、第2期から減少している。その他の者も、同様に、第2期から減少している。

なお磐城中学は、実業関係の就職者と、その他の者の数が、それぞれ、今回の検討した、先発旧制中学4校（安

積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学) と会津中学の計5校の中で、一番多い。

表4 福島中学の昭和2-13年卒業者の4年ごとの進路状況

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専門 学校及之 と同程度 学校入学 者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署二 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	實業二就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	51	119	34	2	9	1	150	258	624
S6-9	35	119	31	2	6	5	136	297	631
S10-13	42	86	18	18	17	11	70	248	510
合計(人)	128	324	83	22	32	17	356	803	1,765
『全国中学校二関スル諸調査 第九卷(昭和2年、3年)、第十卷(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一卷(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二卷(昭和11-13年、15年)』から作成									

表4は、福島中学の昭和初期の進路状況をまとめたものである。先ず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、横ばい傾向にある。専門学校への入学者数は、官公立は、昭和10-13年の第3期に減少している。私立は、年々、減少傾向にある。なお福島中学は、高等学校・大学予科、官公立専門学校のそれぞれの入学者総数が、今回の検討した、先発旧制中学4校(安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学)と会津中学の計5校の中で、一番多い。軍関係諸学校への入学者数は、他の中学と同様に、昭和10-13年の第3期に、それまでより9倍増加している。

次に、就職者についてだが、官公署へ就職する者は、ほぼ横ばい傾向にある。また教員は、先の磐城中学とは逆に、年々、増加している。実業関係は、反対に、年々、減少している。その他の者は、横ばい傾向にある。

表5 相馬中学の昭和2-13年卒業者の4年ごとの進路状況

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専門 学校及之 と同程度 学校入学 者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署二 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	實業二就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	9	106	36	3	4	3	122	272	555
S6-9	21	48	52	6	18	6	258	171	580
S10-13	10	42	22	25	68	7	215	171	560
合計(人)	40	196	110	34	90	16	595	614	1,695
『全国中学校二関スル諸調査 第九卷(昭和2年、3年)、第十卷(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一卷(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二卷(昭和11-13年、15年)』から作成									

表5は、相馬中学の昭和初期の進路状況をまとめたものである。先ず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、昭和6-9年の第2期に増加し、その後減少している。専門学校への入学者数は、官公立は、

年々、減少している。私立は、昭和6-9年の第2期に増加し、その後減少している。軍関係諸学校への入学者数は、他の中学と同様に、昭和10-13年の第3期に、それまでより4倍以上増加している。先に示した、先発校3校と比べて、高等学校・大学予科と官公立の専門学校への入学者数が少ないことが、特徴的である。その理由としては、当然、生徒数³⁾、生徒の学力や保護者の意識や経済力はもちろんのこと、学校の立地—相馬中学だけ郡部に一等も関係していると思われる。

次に、就職者についてだが、官公署へ就職する者は、年々、増加している。なお相馬中学は、官公署の就職者数が、今回の検討した、先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）と会津中学の計5校の中で、一番多い。逆に教員は、年々、減少している。実業関係は、昭和6-9年の第2期に増加し、その後減少している。その他の者は、年々、減少している。

これらの表2から表5の検討から、先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）全体としては、以下のことがいえる。

- ①高等学校・大学予科への入学者数は、各中学によって差が見られるが、全体としては、やや減少傾向にある。
- ②専門学校への入学者数は、官公立は、増加傾向の中学と、減少傾向の中学に分かれた。私立は、全体としては、横ばい傾向にある。
- ③軍関係諸学校への入学者数は、程度の差はあるものの、昭和10年以降、すべての中学で、大幅に増加している。
- ④官公署へ就職する者は、すべての中学で増加している
- ⑤教員、実業関係、その他の職種等の者の数は、各中学によって差が見られる。

(3) 会津中学の進路状況について

	高等学校 及大学予 科入学者	官公立専 門学校及 之と同程 度学校入 学者	私立専門 学校及之 と同程度 学校入 学者	陸海軍諸 学校入学 者	官公署ニ 奉職シタ ル者	教員トナ リタル者	實業ニ就 キタル者	其ノ他ノ 者	合計(人)
S2-5	41	49	80	8	12	10	102	346	648
S6-9	29	51	74	14	17	6	236	341	768
S10-13	20	97	59	26	45	4	169	280	700
合計(人)	90	197	213	48	74	20	507	967	2,116
『全国中学校二関スル諸調査 第九巻(昭和2年、3年)、第十巻(昭和4年、5年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十一巻(昭和6-10年)』									
『全国中学校二関スル諸調査 第十二巻(昭和11-13年、15年)』から作成									

表6は、会津中学の昭和初期の進路状況をまとめたものである。まず、進学者についてだが、高等学校・大学予科への入学者数は、年々、減少している。専門学校への入学者数は、官公立は、年々、増加している。私立は、

逆に年々、減少している。軍関係諸学校への入学者数は、年々、増加しているが、元々他の中学に比べると、入学者数が多かったのも、増加率は、それほど高くない。なお会津中学は、私立専門学校と軍関係諸学校の入学者数が、今回の検討した、先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）と会津中学の計5校の中で、一番多い。このことは、会津中学の進路の特徴であるといえる。参考までに、昭和初期における会津中学の卒業生の本籍地（出身地）約50%は現在の会津市内で、残りの生徒は周辺部もしくは県内外からの遠距離通学者と下宿生である⁴⁾。

会津中学が、軍関係諸学校へ多くの入学者を出したことについては、そもそも明治期に、会津人は時の権力と直結する政界、官界での道を閉ざされたが、その反動として教育界、軍人の世界に多くの偉材を送り出している、という指摘がある⁵⁾。実際、明治38年から明治43年までの陸軍士官学校への進学者数において、会津中学は19名を占めており、東北地域の中学としては、仙台一中の45名、庄内中学の32名に次いで、山形中学と並んで3番目の位置づけである⁶⁾。参考までに、仙台一中が多いのは、明治期に全国に6校あった陸軍幼年学校の内の1校が、仙台にあったことも関係していると思われる。山形県の中学が多いことについては、山形県自体が多くの軍人を輩出してきたという指摘がある⁷⁾。

会津中学の昭和期の進路に関する状況については、昭和8年修了生の以下の様な回想⁸⁾からも、軍関係諸学校への進学が非常に重視されていたことが確認できる。

「(前略) 陸軍士官学校、海軍兵学校を志望する者が急激に増加し、各学年の十番以内の秀才達の約半数は、陸士か海兵に行くのがあたりまえにさえたのである」

また、それを支える組織として、軍人の応援組織の活動についても、以下の様な指摘がある⁹⁾。

「よく稚松会という、軍人の学校受験奨励応援会の退役軍人の先輩が来られて話をされた。この会は、その頃相当な勢力があった。特別に補習を開いたり、猪苗代湖畔学校を開いたりして応援してくれた。」

この稚松会については、創立百周年を記念した、卒業生代表の座談会においても、昭和19年に4年で修了した卒業生からも以下の様な指摘がある¹⁰⁾。

「勤労働員は、私の頃、四年で出た生徒にはなかった。五年まで残った世代は、陸海軍を養成する稚松会が補習をやった時期もあった。」

もっともこの時期、全国的に軍関係諸学校への進学が重視されていたことも事実である。特に従来から、軍関係諸学校への進学者が多かった九州の旧制中学は、昭和初期に加速度的に増加しているという指摘がある¹¹⁾。

次に、就職者については、官公署へ就職する者は、年々、増加している。逆に教員は、年々、減少している。実業関係は、昭和6-9年の第2期に増加し、その後減少している。その他の者は、年々、減少している。

4. まとめと今後の課題

会津中学校生の昭和2-13年の時期における進路状況の推移を、先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）の生徒の進路状況と比較・検討した結果をまとめると、以下のことがいえる。

1. 高等学校・大学予科への入学者数は、会津中学も先発旧制中学4校（安積中学・磐城中学・福島中学・相馬中学）も、全体としては、やや減少傾向にある。
2. 専門学校への入学者数は、官公立は、増加傾向の中学（会津・安積・磐城）と、減少傾向の中学（福島・相馬）に分かれた。私立は、増加傾向の中学（安積）と、横ばい傾向の中学（磐城・相馬）と、減少傾向の中学（会津・福島）に分かれた。会津中学は、私立専門学校の入学者数の全体は、一番多い。
3. 軍関係諸学校への入学者数は、昭和10年以降、すべての中学で、大幅に増加している。会津中学は、軍関係諸学校の入学者数の全体は、一番多い。
4. 官公署へ就職する者は、すべての中学で増加している。
5. 教員、実業関係、その他の職種等の者の数は、各中学によって差が見られる。

会津中学の進路の特徴として、顕著な点は、増加傾向にある軍関係諸学校への入学者数の多さと、減少傾向ではあるが私立専門学校の入学者数の多さである。前者については先に説明したとおり、地域の歴史的な風土と学校自体の風土や取り組みが影響していると考えられる。後者については、本稿では確認できなかったが、城下町ということもあり、保護者の社会階層や経済力が影響している、と推察される。

今後の課題としては、もっと長いスパンでの比較・検討と、各学校の学校誌史、校友会誌等のもう少し詳細な比較・検討も必要であろう。

註

- 1) 渡辺一弘 2015, 126 頁。
- 2) 昭和15年は、具体的な学校の進学者が分からず、県別の入学者の総数しか分からないので、今回の分析からは除外した。
- 3) 参考までに、昭和2年の各中学全体の学級数と生徒数は、以下の通りである（福島県教育センター編 1973, 144 頁）。
 - ・安積中学（20 学級、850 人）
 - ・磐城中学（23 学級、1039 人）
 - ・福島中学（15 学級、671 人）

- ・相馬中学 (15 学級、655 人)
- ・会津中学 (20 学級、908 人)
- 4) 会津高等学校百年史編纂委員会 1991, 556 頁の、「表 4 昭和前期各年度会中卒業生の本籍地 (出身地)」より算出。
- 5) 河出書房新社編集部編 1986, 59 頁。
- 6) 斎藤利彦 1995, 150 頁。
- 7) 樋口清之 1983, 72-73 頁。
- 8) 会津高等学校創立七十周年記念事業実行委員会 1960, 103 頁。
- 9) 同上 105 頁。
- 10) 福島民報社編 1990, 200 頁。
- 11) 前掲 2015, 130-131 頁。

主要参考文献・資料

- 会津高等学校創立七十周年記念事業実行委員会 1960, 『福島県立会津高等学校 創立七十年周年記念誌』。
- 会津高等学校百年史編纂委員会 1991, 『会津高等学校百年史』。
- 会津若松市史研究会編 2006, 『会津若松市史 8 会津近代の始まり歴史編⑧近代明治一復興、そして若松市の誕生一』。
- 尾崎ムゲン 1999, 『日本の教育改革一産業化社会を育てた 130 年一』中公新書。
- 河出書房新社編集部編 1986, 『県別性格診断』河出書房新社。
- 黒羽亮一 1994, 『学校と社会の昭和史(上)』第一法規出版。
- 斎藤利彦 1995, 『競争と管理の学校史 明治後期中学校教育の展開』東京大学出版会。
- 祖父江孝男 1971, 『県民性』中央公論社。
- 樋口清之 1983, 『出身県でわかる日本人診断』角川書店。
- 広田照幸 1989, 「進路としての軍人一陸軍士官学校の受験を中心に一」『アカデミア 人文・社会科学編 第50号(204集)』南山大学。
- 1997, 『陸軍将校の教育社会史一立身出世と天皇制』世織書房。
- 福島県教育センター編 1972, 『福島県教育史 第一巻』。
- 福島県教育センター編 1973, 『福島県教育史 第二巻』。
- 福島民報社編 1990, 『学而のもとに一会津高校百年』。
- 吉本俊二 1994, 『一目でわかる学校系列と教育業地区』日本実業出版社。
- 渡辺一弘 1998, 「昭和初期の中等学校生の進路選択 (1) 一熊本県の 2 校を事例として一」『日本教育社会学会 第 50 回大会 発表要旨集録 1998』326-327 頁。
- 2015, 「昭和初期の旧制中学校生の進路選択に関する研究一九州の事例を中心に一」『別府大学短期

『大学部紀要』第34号 123-132頁。

《付記》資料の引用に際しては、旧字体の一部は新字体に改め、句読点や濁点を付した。また明らかな誤植、間違いと判断できるものは訂正した。なお本稿は、平成28年度会津若松市郷土研究作品募集（一般成人部門）に応募して、準奨励賞を受賞した「昭和初期の旧制会津中学校生の進路状況に関する研究—福島県内の先発旧制中学4校の状況との比較・検討を中心に—」の副題を変え、内容を一部、加筆・修正したものである。

